

「バリ」とは、バングラデシュの農村で典型的な父系大家族の屋敷地のこと。「バリ福笑いマップ」は、バングラのアマラボ村に住むソフィアさん一家を例に、敷地に家や牛小屋、果樹、井戸などのピースを福笑いのように並べていくアクティビティです。

■タイトル	バリ福笑いマップ—バングラデシュの村の暮らし、ソフィアさんちを知る	
■実施日時	2002年6月11日(火)	■ねらい
■対象	中学3年生 15名	(1) ソフィアさんの家族の暮らしを知ることで、バングラデシュの農村の暮らしを身近に感じる。
■準備	<ul style="list-style-type: none"> バリ福笑いマップ バングラデシュのフォトランゲージ「大地・人・暮らし」より班の数の写真 ボティ(包丁)、パカ(うちわ)、コモク(楽器)、ルンギ(男性用腰巻)等の生活用品 マジック(黒、赤、青) 模造紙 黒板(マグネットが貼れる物) ふりかえりシート 	(2) 異文化理解より多文化共生の感覚を育む。
		(3) さらに日本での自分たちの家族や暮らしに思いをめぐらせる。
■実践者	東 宏乃 FAX 042-345-9336 E-mail: azuma@jca.apc.org (共育ファシリテーター・国際/環境/教育、(特活)シャプラニール=市民による海外協力の会 評議員・開発教育教材スタディーツアー参加) ■シャプラニール事務局(担当:勝井) TEL 03-3202-7863 URL: http://www.shaplaneer.org/	■展開(50分×2コマを連続授業として)
		I. 導入ワーク 35分 II. 「バリ福笑いマップ」 20分+α III. 成果発表と共有 35分 IV. ふりかえり 10分

I. 導入ワーク

- ① 「部屋の四隅」で自己紹介をし、その結果で5人ずつ3のグループに分ける。
- ② グループワーク「ブレン・ストーミング」の練習をする。司会・記録・発表・うなずき担当の選出、ルール説明。
- ③ 各班に、バングラデシュの生活用品を1つずつ配り、それぞれが何で、誰がどのように使うものか考える。
- ④ 次に、各班に1枚ずつ写真を配る。(「渡し舟に人と牛」「中庭に人と牛」「牛の鋤きで土起こし」「首都の渋滞」など)
- ⑤ 写真に写っているものを読み込み、すべて書き出してもらう。
- ⑥ 書き出したコトの中で、日本にないモノ・ないコトを赤色マジックで囲み、発表する。
- ⑦ ⑥と同様に、日本にあるモノ・あるコトを青のマジックで囲む。
- ⑧ どんなことに気がついたか、グループで発表し、読み解いたことを共有する。

▼フォトランゲージで、日本人には身近でないバングラデシュの生活を知る。このワークの後、バングラデシュの暮らしは何だかスゴイネ、という感覚が参加者に起こる。丁寧にこの導入ワークをすると、南アジ

アの生活は悲惨だとか、村人の服装がみすばらしいという感想はなくなる。バングラデシュの洪水についても、そういう風土の中でちゃんと暮らしているという、感心や尊敬の気持ちになる。

「バリ福笑い」で描かれるであろう農村の暮らしの導入になっている。

II. バリ福笑いマップ

■導入のためのアイスブレイキング

- ① 各班に「アマラボ村の農村風景が写った写真のカラーコピー」を配り、どんな暮らしがあるか、考えてもらう。(稲作、機械化されていない農業、川が身近で水運が発達した生活、など)
- ② 黒板に、ショミティ(バングラデシュ農村の相互扶助グループ)のリーダーであるソフィアさんの家族9人の家系図を書く。この時、家族の続柄、名前、年齢を明示する。
- ③ 「この家族、ソフィアさんちを訪問します。」と言い、各班にソフィアさん家族の写真を見せる。
- ④ 家族がどんな生活をしているか、写真

■「バリ福笑いマップ」の中身

- ・ 敷地を表す厚紙
- ・ 屋敷のピース: 家、家畜、小屋、トイレ、井戸、果樹等(不要なピースとして、イスラム教では食べない豚のピースも入れてある。)
- ・ 写真シート: アマラボ村の農村風景、ソフィアさんの家族
- ・ 家族カード

から気づいたことなどを、各班から3つずつ発表してもらう。

▼③で家族の写真を見せるときに、「誰がどの人がわかりますか?」「若い娘さんはどんな服装(学校の制服)していますか?」など、グループを回って声をかける。
▼家族の紹介を丁寧にやると、この後ピース並べをするときに、ピースの絵柄の細部にこだわることなく、家族の日常生活や、隣家との人間関係、屋敷地の配置全体に考えをめぐらせることができる。

■ピース並べゲーム

- ① 敷地(屋敷地バリ)を表す台紙と屋敷のピースを各班に1セットずつ配る。
- ② 「グループで相談し、屋敷地を完成して下さい」と、ピースを並べるよう促す。
- ③ ピースを並べ始めたら、「どの班も、無意識の内に『あるテーマ』をみつめて、

議論し並べているはず。そのテーマをもっとはっきりとさせて、全体を仕上げましょう」と声をかける。

- ④ 「発表シート」を配る。シートにグループで話し合ったことをまとめてもらう。「発表シート」の例:

- (1) ソフィアさんのバリで、自分が真似したいと思った、暮らしの工夫はどのようなことですか?
- (2) 1日コピール君になるとしたら、あなたは、このバリで何をして過ごしたいですか?

▼話し合ったときに盛り上がった内容については、そのシートの項目に無いことも書くよう促す。

シートはあくまで目安で、シートの項目に従う必要はない。「このワークには決まった正解はない、あなたたち(生徒や参加者)が考えたことの方が大事である」ということを伝える。

▼シートを最初から配ると、グループ内で問いから問いが生まれる雰囲気を作れないので注意する。実際の授業で、グループワークの内容そのものに意味があった場合は、回答シートへの記入は省いてよい。

《参加者の様子》

普段何気なくやりすごしていることに、ハテナ?と疑問をもって討論した。「牛小屋と人間の住まいとは、別なのかな?」「トイレはどこにあるんだ? 家から遠い方がいいんじゃないか?」「井戸を中心にしました。皆が使えるように。」「果樹は盗まれないように、家の裏の近くにあって方がいい。」「牛が移動しやすく、また子どもが遊ぶために、真中に広場をつくった」など、いろんなアイデアが出る。

III. 成果発表

- ① 発表する班の回りに全員集まり、並べたピースを見てその班の説明を聞く。質問やコメントも出しあう。各班順番に行う。

▼班によって全く違う並べかたをしているおもしろさに驚く。同時に、実際のソフィアさんちのバリはどんなものか、リアリティーをもって期待する伏線とする。

- ② ファシリテーターが、アマラボ村で典型的な「ソフィアさんちのバリ」の家と中庭の配置を、黒板に巨大マグネットを貼って示す。
- ③ 参加者から感想や質問を聞く。

IV. ふりかえり

■自分たちの生活と比べて

- ① 各人にふりかえりシートを配り、記入してもらう。
- ② 感想を発表する。

▼ペーパーワークを重視するのではなく、個人の想いが浮かんでくることを大事にする。(音楽を流すのもよい)

■発展のための「まとめ」

参加者の中で朗読が得意な人に「ソフィアさんの家族—1人称の世界(暫定版)」の中の1人の物語を読み上げてもらい、それを聞きながら、各自自分の生活にも思いをめぐらせる。

参加者の感想

- ・ みんなが気持ちよく暮せるようにいろいろ工夫されていて、頭がいいと思った。
- ・ 私が楽しいと思ったのは、中庭にいろんな人が集まれるようなスペースがあったこと。隣のバリと果樹で区切ること。
- ・ 私の家族も親戚がかたまて家があるが、「バリ」の家族のように、牛もいっしょに1つの村のように丸くなって住んでいて、おもしろい。
- ・ バリという屋敷の作りで、家族や近隣の人同士が、「コミュニケーション」を大事にして暮らしていて、うらやましい。
- ・ 1日体験とかで行ってみたいです。「のほほん」としてそうで、幸せに暮せそう。こういう環境はすばらしいと思います。

実践者の感想

- ・ この教材ワークの一番良い点は、まず

「楽しい」ということ。グループの中で、問いから問いが生まれ、参加者どうしの関係性の中で各人のアイデアがひきだされる点である。

- ・ アジアの農村をほとんど知らなくても、電気も水道もない暮らしについて、ポジティブにとらえ、井戸やトイレの配置をワイワイと相談して決めるので、生活への理解がおのずとすすむことがわかった。
- ・ 勉強ができる優等生より、大家族で暮らしていたり、生活力のある生徒がこのワークをリードしていた。これは、教材ワークが「総合的な学習の時間」における「生きる力」をはぐくむという目的にあっていることと、先生方から評価をいただいた。
- ・ 実際のプロジェクトの現場を第三世界にもつNGOとして教材ワークをつくった場合、次の3つが大事だと考える。

1. ワークが双方向であること
2. 1人称で語られるリアリティがあること(参加者の心が自然と揺り動かされる)
3. テーマが、参加者の暮らしや人生にフィードバックされること

- ・ 教材は、ワークショップ形式の授業の流れ中で、生徒の豊かな感性や生活世界に出てこそ、意味があると気づかされた。教材はそれを引き出すのに必要なだけなので、例えば、現地駐在経験がなくても、良いファシリテーターであれば、十分にこのワークが進められると考えられる。
- ・ ソフィアさんの家族が実際にバリでどう暮らしているか、ビデオなどでもっとリアルに知りたいたい、生徒からも先生からも要望があった。今後の課題である。(報告 東 宏乃)

■この教材は、改定新版をつくり、2003年から貸し出す予定です。それ以前に、この教材ワークを体験したい方や、小学校での実践例に興味のある方は、筆者(東)までご連絡ください。

開発教育実践事例報告 募集!

「開発教育実践事例報告」は、会員の皆さまの取り組みの紹介を通して、手法や教材などの情報交換・意見交換の場にしていきたいと思っています。ぜひ皆さまの実践のご報告をお寄せください。